

資料 (其の一)

〔この二篇は、一月二十二日、佐伯氏位解祭りに使用〕

異説・佐伯耨峯惟治記

原本は分なり乱れを字本、文意の通じないところ多し。若干の補正を加え、定本「耨峯礼実録」との相違の点に注目したい。今回は、長高知山の最期のこととみだけられた。(一)内は張介者の注解である。

夫より豊州日州の國境に至りて難所なる山坂あり。この山地名を長高知山というなり。この山の峯は登り難し、四方を相手がめ仰せられけるは、さき山は陣屋を建てよとて、ここに轉々逗留いたし、爰さきはらし休養し、府政表の孫子さうかかひ、御家来衆に申しつけ、この山の峠に二間四面の陣屋を造らせ、暮を打たせてし、はるく滞夜。

惟治公は長高知山下卯の所へ便り、宇山城からい、法家大友よしの叔母のこととを待ち居たるが、櫻の花は散り失せて、千歳を待たし千代鶴の、果てしばかりを父上は思ひぬる願の長高知の、雲井に渡るほととぎす、ただららめしく長景が、たてかきごとと合点して、左だ一筋に恨みの矢を放ち、近づく敵をば一騎にても討ち取れと、弓力のまき伊賀守(一)、宮脇周防守、主計、監物、古馬之助、主水、鶴之、捧之進、式部、梶右工門、斎藤氏、近江守長景に射かくる矢、けわしき長高智の峯をさして登りける使者はそれとも思わねば、何の苦もなくはつし

りと、胸板目がけて射かくれば、使者はあえなく討ちけり。それけがすなと長景の手下の侍数十人、火花を散らして衝けども、けおしき難所長高智より、矢ぶすまえて射かくれば、如何なる鬼神豪勇も、叶わぬ今日の夕、長高智にしげる大山草原へ、真逆縁の逆落して、一々残らず討ちけり。

思ひがけなき陣してきても佐伯の惟治公、一期をこに残りおく、我とわが手はわが首の彼に両手を掛時争合、因りえいと、かき切り首は地に落とすも、虚空をたし、舞い上がる、はためきひらめき飛行する、まこと、眼を驚かす有様にて、惟治公も伝え聞く唐土の眉間尺にひとし、最期もかくやと思われけり。

其の外伊賀守・周防守・安藤・淡尾・持原・阿崎・野々下・横山・熊地・斎藤・水口まで、其外小侍數十人残りし者、馬二匹、惟治公の鷲鷹毛の馬、長景方の自馬と、両方の谷間より必会いがしらは喰い合はしが、何れも馬馬にしろし、其主人の先達を見届けて、おとに残りて合戦し、あみのきけりはねとびまわり、いかにも二足の馬の声、かみふせられつかみふせつ、畜生ながらも主人の仇と、恨みか一念かみせられ、(意味不明)鷹鷹毛は義にかはねを曝しける。自馬は是より南をさし、大海の中に墜入りて、終に命果てにけり。

無残なる我、惟治公のかくの如き有様は、言うち中々おろかたり。惟治公の時、御年三十三才にて、大永七年七月廿五日の御逝去なり。大光院殿前薩州刺史悟嶠正徹大居士と号す。千代鶴御曹子、御年七歳なり。大光院殿王百宗伯大禪定門と号す。(以下 略す)